

授業計画書

基本情報	科目名称	解剖学Ⅲ			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	講義	前期	3年	2	40
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	青木 良仁					青木 良仁

教科書	『解剖学』 南江堂
参考文献・資料等	「解剖学ワークブック」 医歯薬出版株式会社

授業の方法及び内容	国家試験対策として、前半は講義形式で解剖学全体を復習し、後半は章ごとの問題演習を実施 解剖学のみならず国試対策とし、生理学などに関連するような事項に要点をおき講義する。
到達目標	上記内容によって解剖学における基礎学力を高めていくと共に、問題演習によって国家試験の頻出問題の概要や予想される問題に対する解答力を身につける。
準備学習の内容	2年生までの講義に基づいた学習によって準備とする。
授業期間全体を通じた授業の進め方	前期のみの半期になるため章ごとの要点を中心に解説していく。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点 0点またはマイナス10点		

授業計画

1	講義：人体解剖学概説
2	講義：運動系
3	講義：脈管系
4	講義：内臓系
5	講義：内分泌系
6	講義：神経系
7	講義：感覚器
8	講義：体表解剖
9	講義：映像解剖
10	問題演習：人体解剖学概説
11	問題演習：運動系
12	問題演習：脈管系
13	問題演習：内臓系
14	問題演習：内分泌系
15	問題演習：神経系
16	問題演習：感覚器
17	問題演習：体表解剖
18	問題演習：映像解剖
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	生理学Ⅲ			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	講義	後期	3年	2	40
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	山 美喜子					山 美喜子

教科書	『生理学』南江堂
参考文献・資料等	人体の正常構造と機能 日本医事新報社 病気がみえる

授業の方法及び内容	臓器器官の構造、働きについて解説し、国家試験形式の演習を行う。
到達目標	上記項目の柔道整復師にとっての重要性を理解すると同時に、国家試験の出題傾向を把握する。
準備学習の内容	授業と関連した内容の事前課題の取り組み。
授業期間全体を通じた授業の進め方	毎授業ごとに理解度の確認のための小テストを行う。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	物質の移動 受動輸送（拡散、ろ過、浸透） 能動輸送
2	内分泌とは ホルモンの分類
3	下垂体（前葉）のホルモン（種類と働き） 階層支配とは
4	視床下部で産生されるホルモン バゾプレッシンの作用
5	甲状腺ホルモン（性質と作用） 分泌異常による疾患
6	カルシトニンとパラソルモンの血中 Ca^{2+} 濃度の調節
7	副腎皮質 糖質コルチコイド（性質と作用）
8	副腎皮質 レニン・アンジオテンシン・アルドステロン系
9	副腎髄質 カテコールアミン（種類と働き）
10	内分泌による血圧の調節
11	内分泌による血糖値の調節
12	生殖 女性の生殖に関与するホルモン、性周期（卵巣周期、月経周期）
13	生殖 妊娠成立、胎盤の働き、分娩
14	脳神経（12 対の種類と働き）
15	筋線維の分類 興奮収縮連関 筋収縮の種類
16	脊髄の運動調節 伸張反射（仕組み、筋紡錘）
17	脊髄の運動調節 伸張反射（種類） 筋電図
18	小脳 大脳基底核 大脳皮質（構造、運動調節の働き）
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	運動学			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	講義	前期	3年	2	40
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	庄司 智則					庄司 智則

教科書	『運動学』 医歯薬出版株式会社
参考文献・資料等	

授業の方法及び内容	本授業は講義形式によって行われ、身体運動を力学的立場から検証すること、スポーツに関するより良い動作の獲得を得ることなどを学修します。教科書を中心に、図書、雑誌等の参考資料を使って授業を進めます。
到達目標	運動器の構造、機能と機能解剖を理解し、柔道整復師としての施術またはアスレティックトレーナーとしてのコンディショニングが行えるような素養を身に付けることです。
準備学習の内容	予め各回の授業前には1.5時間程、次回授業予定の対応する教科書のページを読み、キーワードの意味を調べてください。授業後には復習として1.5時間程、授業内容について教科書を見ずに解答できるように、繰り返し復習をしてください。
授業期間全体を通じた授業の進め方	毎時間プリントを配布します。 それに沿ってパワーポイントを使いながら説明し、授業を進めていきます。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中 60点以上合格 平常点 0点またはマイナス 10点		

授業計画

1	オリエンテーション・運動学とは
2	運動学の基礎・身体運動と力学の法則
3	筋-骨格系の構造と機能
4	神経系の構造と機能
5	感覚と知覚
6	運動の発現と制御（反射と随意運動）
7	身体各部位の運動（上肢：上肢帯・肩関節）
8	身体各部位の運動（上肢：肘関節・前腕）
9	身体各部位の運動（上肢：手関節・手）
10	身体各部位の運動（下肢：股関節）
11	身体各部位の運動（下肢：膝関節）
12	身体各部位の運動（下肢：足関節・足部）
13	身体各部位の運動（体幹・脊柱）
14	姿勢
15	歩行
16	いろいろな運動の仕組み（走運動など）
17	運動発達
18	運動学習
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	柔道整復術の適応			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	講義	前期	3年	2	40
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	竹内 仁					竹内 仁

教科書	『医療の中の柔道整復』 南江堂
参考文献・資料等	

授業の方法及び内容	教科書を主として配布プリント、パワーポイントを使い、学生への質問も取り入れる。
到達目標	柔道整復師が臨床で遭遇する可能性のある運動器系の疾患について、手術適応の可否および適切な対応について理解できる。 各障害や疾患の病態を理解して適切な評価を行うことができる。
準備学習の内容	資料を用いた予習と復習
授業期間全体を通じた授業の進め方	柔道整復術の適応についての理解を深めるため、実践的な授業を行う。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	柔道整復術の適否を考える (1) 施術の適応と判断
2	柔道整復術の適否を考える (2) 症状と所見
3	損傷に類似した症状を示す疾患 (1) 内臓疾患の投影を疑う疼痛
4	損傷に類似した症状を示す疾患 (2) 見逃してはいけない整形外科疾患
5	損傷に類似した症状を示す疾患 (3) 肝臓疾患 腰痛
6	損傷に類似した症状を示す疾患 (4) 化膿性疾患 軟部組織損傷
7	血流障害を伴う損傷
8	末梢神経損傷を伴う損傷
9	脱臼・骨折と外出血損傷
10	外傷性クモ膜下出血 急性脳内血腫
11	病的骨折と脱臼
12	意識障害を伴う損傷
13	深部静脈血栓症 (DVT) 肺血栓塞栓症 (PTE)
14	脊髄損傷と呼吸運動障害
15	内臓損傷の合併が疑われる損傷
16	高エネルギー損傷
17	柔道整復師が知っておくべき各種画像検査 (1) 医用画像総論
18	柔道整復師が知っておくべき各種画像検査 (2) X線、CT、MRI、超音波
19	期末試験
20	試験解説 まとめ

授業計画書

基本情報	科目名称	関係法規			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	講義	前期	3年	2	40
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	小武 悠希			接骨院等勤務：7年 専門学校勤務：5年		小武 悠希

教科書	『関係法規』医歯薬出株式会社
参考文献・資料等	柔道整復師国家試験出題基準

授業の方法及び内容	教科書およびスライドを用いて講義し、板書しながら理解を深める。
到達目標	柔道整復師法およびその他の医療資格の法律を学び、臨床の現場において法に沿った業務を行える人材の育成。
準備学習の内容	教科書を用いた予習・復習
授業期間全体を通じた授業の進め方	毎回の授業冒頭に前回の復習、授業の終了時にその日の復習をする。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中 60点以上合格 平常点 0点またはマイナス 10点		

授業計画

1	総則
2	免許
3	名簿
4	再免許・再交付
5	試験機関
6	業務
7	守秘義務
8	施術所
9	広告
10	復習
11	中間試験
12	罰則
13	医師法
14	その他の医療資格
15	医療法
16	個人情報
17	柔道整復師法復習
18	医療法復習
19	期末試験
20	総まとめ

授業計画書

基本情報	科目名称	柔道Ⅲ			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	実技	前期	3年	1	40
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	水村 麻輝			接骨院等勤務：5年8ヶ月 専門学校勤務：2年2ヶ月		水村 麻輝

教科書	
参考文献・資料等	(財)講道館 投の形 不昧堂出版 最新 柔道の形 全 柔道会 柔道叢書 岡崎屋書店 柔道大意

授業の方法及び内容	柔道の目的である心身を鍛え自分の力を社会百般に生かせるように教育をしていく。 柔道整復師としての身嗜み、礼法、受身、形、乱取を理論と実技を通して学んでいく。
到達目標	1年から3年を通して、講道館柔道初段を取得できる位置まで学んでもらう。
準備学習の内容	準備体操、回旋運動、ストレッチ体操、前回授業の復習。
授業期間全体を通じた授業の進め方	実技を通して礼法、受身、形、乱取を行っていく。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中 60点以上合格 平常点 0点またはマイナス 10点		

授業計画

1	礼法、基本動作、柔道の教え 認定実技の概要説明
2	礼法、基本動作、嘉納治五郎について 認定実技の動きの確認①
3	礼法、基本動作、講道館の役割 認定実技の動きの確認②
4	礼法、基本動作、柔道の投技・固技
5	礼法、基本動作、投の形（手技 浮落・背負投）、約束乱取（体落）
6	礼法、基本動作、投の形（手技 背負投・肩車）、約束乱取（小内刈・大内刈）
7	礼法、基本動作、投の形（手技 肩車・手技の復習）、約束乱取（大腰）
8	礼法、基本動作、投の形（腰技 浮腰・払腰）、約束乱取（出足払）
9	礼法、基本動作、投の形（腰技 払腰・釣込腰）、約束乱取（送足払）
10	礼法、基本動作、投の形（腰技 釣込腰・腰技の復習）、約束乱取（背負投）
11	礼法、基本動作、投の形（足技 送足払・支釣込足）、約束乱取（各種）
12	礼法、基本動作、投の形（足技 支釣込足・内股）、約束乱取（各種）
13	礼法、基本動作、投の形（足技 内股・足技の復習）、約束乱取（各種）
14	礼法、基本動作、投の形（手技）、約束乱取（各種）
15	礼法、基本動作、投の形（腰技）、約束乱取（各種）
16	礼法、基本動作、投の形（足技）、約束乱取（各種）
17	礼法、基本動作、投の形、約束乱取 復習
18	期末試験
19	礼法、基本動作、試験解説
20	全体を通して総復習

授業計画書

基本情報	科目名称	臨床柔道整復学IVa			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	講義	通年（前期）	3年	4	80（40）
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	瑞泉 誠			接骨院等勤務：10年 専門学校勤務：18年		瑞泉 誠

教科書	『柔道整復学・理論編・実技編』 南江堂
参考文献・資料等	

授業の方法及び内容	教科書の内容を概説し、機能解剖を実施。 その後、発生機序、症状、治療法、予後の流れで解説する。 担当教員は医療施設（接骨院・整形外科等）において、10年間勤務した経験があり、実務経験に基づいて柔道整復師養成に向けた授業を展開する。
到達目標	上記の内容を学生自身が説明することができる。 国家試験レベルの問題を解くことができる。
準備学習の内容	前回の内容を配布資料で確認し小テストに備える。 年間を通じて国家試験に対応するための学習を行う。
授業期間全体を通じた授業の進め方	前回の小テストを行い、振り返りを行った上で、教科書を中心とした授業形態とグループ学習を主体とした授業を適宜選択し行う。

評価前提条件	単位認定に必要となる最低出席回数は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中 60点以上合格 平常点 0点またはマイナス 10点		

授業計画

1	上肢骨折01
2	上肢骨折02
3	上肢骨折03
4	上肢骨折04
5	上肢骨折05
6	上肢骨折06
7	上肢脱臼01
8	上肢脱臼02
9	上肢脱臼03
10	上肢脱臼04
11	上肢脱臼05
12	上肢脱臼06
13	上肢軟損01
14	上肢軟損02
15	上肢軟損03
16	上肢軟損04
17	上肢軟損05
18	上肢軟損06
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	臨床柔道整復学IVb			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	実技	通年（後期）	3年	(4)	80(40)
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	瑞泉 誠			接骨院等勤務：10年 専門学校勤務：18年		瑞泉 誠

教科書	『柔道整復学・実技編』 南江堂
参考文献・資料等	

授業の方法及び内容	教科書の内容を概説し、機能解剖を実施。 その後、発生機序、症状、治療法、予後の流れで解説する。 担当教員は医療施設（接骨院・整形外科等）において、10年間勤務した経験があり、実務経験に基づいて柔道整復師養成に向けた授業を展開する。
到達目標	上記の内容を学生自身が説明することができる。 国家試験レベルの問題を解くことができる。
準備学習の内容	前回の内容を配布資料で確認し小テストに備える。 年間を通じて国家試験に対応するための学習を行う。
授業期間全体を通じた授業の進め方	前回の小テストを行い、振り返りを行った上で、教科書を中心とした授業形態とグループ学習を主体とした授業を適宜選択し行う。

評価前提条件	単位認定に必要となる最低出席回数は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点 0点またはマイナス10点		

授業計画

1	下肢骨折 01
2	下肢骨折 02
3	下肢骨折 03
4	下肢骨折 04
5	下肢骨折 05
6	下肢骨折 06
7	下肢脱臼 01
8	下肢脱臼 02
9	下肢脱臼 03
10	下肢脱臼 04
11	下肢脱臼 05
12	下肢脱臼 06
13	下肢軟損 01
14	下肢軟損 02
15	下肢軟損 03
16	下肢軟損 04
17	下肢軟損 05
18	下肢軟損 06
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	臨床柔道整復学V-1			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	講義	後期	3年	4	80(40)
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	水村 麻輝			接骨院等勤務：5年8ヶ月 専門学校勤務：2年2ヶ月		水村 麻輝

教科書	『柔道整復学・理論編』南江堂
参考文献・資料等	柔道整復学・実技編

授業の方法及び内容	<p>パワーポイントを用いて授業を行う。前期に吸収した知識、技術の向上に努める。</p> <p>且つ現場での私の経験や実際の患者さんにはどういう処置を行うかなどを伝えていく。</p> <p>担当教員は医療施設(接骨院・整形外科等)において、5年8ヶ月勤務した経験があり、実務経験に基づいて柔道整復師養成に向けた授業を展開する。</p>
到達目標	上肢骨折総論、各論の項目を知識、技術の習得。
準備学習の内容	固定具の作り方や固定法、検査法の学習
授業期間全体を通じた授業の進め方	実技と臨床を交えて学習する。

評価前提条件	単位認定に必要となる最低出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	骨折総論①
2	骨折総論②
3	骨折の固有症状
4	骨折の整復法
5	管理指導
6	小児骨折 高齢者骨折
7	総論演習
8	鎖骨骨折
9	肩鎖関節脱臼
10	上腕骨外科頸骨折
11	肩関節脱臼
12	肘関節脱臼
13	上腕骨顆上骨折
14	上腕骨外顆骨折
15	上腕骨内側上顆骨折
16	肘内障
17	試験前練習
18	期末試験
19	試験解説
20	総復習

授業計画書

基本情報	科目名称	臨床柔道整復学V-2			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	講義	後期	3年	(4)	80(40)
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	小武 悠希			接骨院等勤務：5年 専門学校勤務：5年		水村 麻輝

教科書	『柔道整復学・理論編』南江堂
参考文献・資料等	標準整形外科学

授業の方法及び内容	スライドおよび資料を使用しながら板書形式で行う。 担当教員は医療施設(接骨院・整形外科等)において、5年間勤務した経験があり、実務経験に基づいて柔道整復師養成に向けた授業を展開する。
到達目標	下肢を中心とした外傷の鑑別や治療法の習得
準備学習の内容	1年次および2年次の復習
授業期間全体を通じた授業の進め方	復習に重点を置いて行う。

評価前提条件	単位認定に必要な最低出席回数は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。

評価方法	定期試験100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点
------	------------------------------------

授業計画

1	大腿部の外傷
2	大腿部の外傷 2
3	膝の外傷
4	膝の外傷 2
5	下腿部の外傷
6	下腿部の外傷 2
7	足関節の外傷
8	足関節の外傷 2
9	足部の外傷
10	足部の外傷 2
11	絞扼神経障害
12	絞扼神経障害 2
13	骨端症
14	骨端症 2
15	徒手検査法
16	徒手検査法 2
17	固定法
18	固定法 2
19	期末試験
20	総まとめ

授業計画書

基本情報	科目名称	臨床柔道整復学VI-1			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	講義	後期	3年	4	80(40)
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	庄司 智則			接骨院等勤務：4年 専門学校等勤務：14年		加藤 稔啓

教科書	『柔道整復学理論編』南江堂
参考文献・資料等	『運動学』医歯薬出版

授業の方法及び内容	<p>本授業は講義形式にて行われ、前半は柔道整復師に必要な軟部組織についての講義、後半は運動学全範囲の演習問題と解説を行います。</p> <p>とくに後半では、国家試験過去問題を中心とした演習問題に取り組み、国家試験問題出題傾向の把握および弱点の洗い出しを行います。さらに、応用問題にも取り組み、周辺知識の整理と幅広い知識の修得を目指し、国家試験に向け運動学の総括を行います。</p> <p>担当教員は医療施設(接骨院・整形外科等)において、4年間勤務した経験があり、実務経験に基づいて柔道整復師養成に向けた授業を展開する。</p>
到達目標	<p>前半は運動器の構造、機能と機能解剖のさらなる理解をベースにして、柔道整復術に必要な軟部組織損傷の知識と技能を修得し、問題解決能力を養います。</p> <p>後半では国家試験に向けて、重要項目の再確認をします。</p>
準備学習の内容	<p>授業前の予習として1.5時間程、次回授業予定の対応する教科書のページを読み、キーワードについて前以て調べておくと同時に、機能解剖などについて復習をしてください。また復習として1.5時間程、授業内容について教科書を見ずに自分の言葉で説明し、さらに実践できるようにしてください。</p>
授業期間全体を通じた授業の進め方	<p>毎時間プリントを配布します。</p> <p>それに沿ってパワーポイントを使いながら説明し、授業を進めていきます。</p>

評価前提条件	単位認定に必要な出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	頸部の軟部組織損傷
2	胸背部の軟部組織損傷 腰部の軟部組織損傷
3	肩部の軟部組織損傷
4	上腕部の軟部組織損傷 肘部の軟部組織損傷
5	前腕部の軟部組織損傷 手関節部・手指部の軟部組織損傷
6	手関節部・手指部の変形および腱損傷
7	股関節の軟部組織損傷
8	大腿部の軟部組織損傷 膝関節部の軟部組織損傷
9	下腿部の軟部組織損傷
10	足部の軟部組織損傷
11	身体運動と力学の法則
12	身体各部位の運動1（上肢）
13	身体各部位の運動2（下肢）
14	身体各部位の運動3（体幹・脊柱）
15	歩行・姿勢
16	反射
17	運動発達・運動学習
18	期末試験（ペーパー）
19	期末試験（実技）
20	総合復習

授業計画書

基本情報	科目名称	臨床柔道整復学VI-2			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学 年	単位数	授業時間数
	専門分野	講 義	後 期	3 年	(4)	80 (20)
	授業担当者 (所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	加藤 稔啓			接骨院等勤務：12年 専門学校勤務：20年		加藤 稔啓

教科書	「柔道整復学理論編第6版」「柔道整復学実技編第2版」「包帯固定学第2版」
参考文献・資料等	他に必要な内容は、プリントや板書を用いて学習を進める。

授業の方法及び内容	柔道整復臨床に必須となる柔道整復の様々な技術（実技）を取り上げ、知識として深掘りすることで理解を更に深め、3年間の勉学の総仕上げとする。 担当教員は医療施設（接骨院・整形外科等）において、12年間勤務した経験があり、実務経験に基づいて柔道整復師養成に向けた授業を展開する。
到達目標	柔道整復の様々な技術（実技）についてその操作、方法の理論、エビデンス、応用などを学び、習得する。
準備学習の内容	復習が重要。授業を受けたその日のうちに①教科書を読み返す ②ノートをまとめる ③練習問題を見直す などをして欲しい。
授業期間全体を通じた授業の進め方	講義形式で進めるが、毎回演習を行う。小テストも実施する。授業が効率よく進めば専門領域の内容やNIEも取り入れつつ進める。

評価前提条件	単位認定に必要な出席率は80%以上。		
成績評価基準	評 価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不 可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。

評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点
------	-------------------------------------

授業計画

1	○オリエンテーション（この授業の進め方、計画確認） ○鎖骨骨折定型的1：徒手整復
2	○鎖骨骨折定型的2：固定法、成功のポイント
3	○コーレス骨折：諸家の整復法と固定法
4	○肩関節前方脱臼1：教科書法の注意点
5	○肩関節前方脱臼2：諸家の方法
6	○肩関節前方脱臼3：「初回脱臼後、ABR」「外旋位固定と強内旋位固定」
7	○肘関節後方脱臼：諸家の方法
8	○この授業の振り返り
9	○期末試験
10	○試験解説 ○総括

授業計画書

基本情報	科目名称	臨床柔道整復学VI-3			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学 年	単位数	授業時間数
	専門分野	講 義	後期（後半）	3 年	(4)	80 (20)
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	加藤 稔啓			接骨院等勤務：12年 専門学校勤務：20年		加藤 稔啓

教科書	「柔道整復学理論編第6版」「柔道整復学実技編第2版」「包帯固定学第2版」
参考文献・資料等	他に必要な内容は、プリントや板書を用いて学習を進める。

授業の方法及び内容	<p>柔道整復臨床に必須となる柔道整復の様々な技術（実技）を取り上げ、知識として深掘りすることで理解を更に深め、3年間の勉学の総仕上げとする。</p> <p>担当教員は医療施設（接骨院・整形外科等）において、12年間勤務した経験があり、実務経験に基づいて柔道整復師養成に向けた授業を展開する。</p>
到達目標	柔道整復の様々な技術（実技）についてその操作、方法の理論、エビデンス、応用などを学び、習得する。
準備学習の内容	復習が重要。授業を受けたその日のうちに①教科書を読み返す ②ノートをまとめる ③練習問題を見直す などをして欲しい。
授業期間全体を通じた授業の進め方	講義形式で進めるが、毎回演習を行う。小テストも実施する。授業が効率よく進めば専門領域の内容やNIEも取り入れつつ進める。

評価前提条件	単位認定に必要な出席率は80%以上。		
成績評価基準	評 価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不 可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。

評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点
------	-------------------------------------

授業計画

1	○オリエンテーション（この授業の進め方、計画確認） ○上腕骨顆上骨折伸展型：教科書法の理解
2	○上腕骨外顆骨折：分類と Jacob の回転転位
3	○Boxer 骨折：整復法と固定法 ○指節間関節脱臼：徒手整復のコツ
4	○顎関節脱臼：整復の実際
5	○膝関節損傷の徒手検査 1：tanz、靭帯損傷、ADS と PDS、sugg sign、N-test
6	○膝関節損傷の徒手検査 2：半月板損傷、膝損傷の症状まとめ
7	○足関節外側靭帯損傷
8	○この授業の振り返り
9	○期末試験
10	○試験解説 ○総括

授業計画書

基本情報	科目名称	柔道整復術の臨床的判定			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	講義	後期	3年	2	40
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	竹内 仁			接骨院等勤務：31年 専門学校勤務等：20年		竹内 仁

教科書	施術の適応と医用画像の理解
参考文献・資料等	柔道整復学・理論編

授業の方法及び内容	教科書を中心に施術の適応を正しく判断できる力を身につけられるよう症状に関する理解をさらに深めさせる。 医用画像の理解を深めるために様々な画像資料を観察し、読影できる能力を養う。 各医用画像の特性を理解できるようになる。 担当教員は医療施設(接骨院・整形外科等)において、31年間勤務した経験があり、実務経験に基づいて柔道整復師養成に向けた授業を展開する。
到達目標	上記の内容を学生自身が説明することができる。 国家試験レベルの問題を解くことができる。
準備学習の内容	前回の内容を配布資料で確認し小テストに備える。
授業期間全体を通じた授業の進め方	前回の小テストを行い、振り返りを行った上で、教科書を中心とした授業形態とグループ学習を主体とした授業を適宜選択し行う。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	柔道整復術の適否について
2	損傷に類似した症状を示す疾患
3	血流障害を伴う損傷
4	末梢神経損傷を伴う損傷
5	脱臼骨折01
6	脱臼骨折02
7	外出血を伴う損傷
8	病的骨折および脱臼01
9	病的骨折および脱臼02
10	意識障害を伴う損傷
11	脊髄障害を伴う損傷01
12	脊髄障害を伴う損傷02
13	呼吸運動障害を伴う損傷01
14	呼吸運動障害を伴う損傷02
15	内臓損傷の合併が疑われる損傷
16	高エネルギー外傷
17	医用画像の理解01
18	医用画像の理解02
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	柔道整復実技Va			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	講義	前期	3年	2	60(40)
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	加藤 稔啓			接骨院等勤務: 12年 専門学校勤務: 20年		加藤 稔啓

教科書	「柔道整復学理論編第6版」南江堂 「包帯固定学第2版」医歯薬出版社	「柔道整復学実技編第2版」南江堂
参考文献・資料等	他に必要な内容は、プリントや板書を用いて学習を進める。	

授業の方法及び内容	臨床で多く遭遇する外傷を課題として設定し、これに対応する診察法、整復手技、検査手技を繰り返し実習し、実際の柔道整復の施術に対応できるよう、これらの方法と手技を順序だてて組み、実践的な演習を行う。担当教員は医療施設(接骨院・整形外科等)において、12年間勤務した経験があり、実務経験に基づいて柔道整復師養成に向けた授業を展開する。
到達目標	柔道整復師が実際の施術で遭遇する外傷への的確な対応力と技能、即ち「臨床力」を在学中に可能な限り多く習得することを目的とする。
準備学習の内容	復習が重要。授業を受けたその日のうちに①教科書を読み返す ②ノートをまとめる ③実技動作を繰り返し復習する などをして欲しい。
授業期間全体を通じた授業の進め方	小グループによる実技演習を行う。 欠席はたとえ一回であっても貴重な学習機会を失うことになる。安易に休まない。 授業が効率よく進めば実技演習の機会を増やす。

評価前提条件	単位認定に必要な出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点~80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点~70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点~60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点~0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	○オリエンテーション	1. 計画確認	2. この実習の進め方
2	○徒手整復法	1. 骨折の徒手整復法	2. 脱臼の徒手整復法
3	1. 鎖骨定型的骨折の診察と整復		
4	1. 上腕骨外科頸骨折外転型の診察と整復		
5	1. コーレス骨折の診察と整復		
6	1. 肩鎖関節上方脱臼の診察と整復		
7	1. 肩関節烏口下脱臼の診察と整復		
8	1. 肘関節後方脱臼の診察と整復		
9	1. 肘内障の診察と整復		
10	○軟部組織損傷への対処	1. 軟部組織損傷の初期処置	2. 軟部組織損傷の診察と検査法
11	1. 腱板損傷の診察と検査法		
12	1. ハムストリングス損傷（肉離れ）の診察と検査法		
13	1. 大腿四頭筋打撲の診察と検査法		
14	1. 下腿三頭筋損傷（肉離れ）の診察と検査法		
15	1. 膝関節側副靭帯損傷の診察と検査法		
16	1. 膝関節十字靭帯損傷の診察と検査法		
17	1. 膝関節半月板靭帯損傷の診察と検査法		
18	1. 足関節外側靭帯損傷の診察と検査法		
19	○ この実習の振り返り1		
20	○ この実習の振り返り2	○総括	

授業計画書

基本情報	科目名称	柔道整復実技Vb			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	講義	後期(前半)	3年	(2)	60(20)
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	加藤 稔啓			接骨院等勤務：12年 専門学校勤務：20年		加藤 稔啓

教科書	「柔道整復学理論編第6版」南江堂 「包帯固定学第2版」医歯薬出版社	「柔道整復学実技編第2版」南江堂
参考文献・資料等	他に必要な内容は、プリントや板書を用いて学習を進める。	

授業の方法及び内容	臨床で多く遭遇する外傷を課題として設定し、これに対応する診察法、整復手技、検査手技を繰り返し実習し、実際の柔道整復の施術に対応できるよう、これらの方法と手技を順序だてて組み、実践的な演習を行う。 担当教員は医療施設(接骨院・整形外科等)において、12年間勤務した経験があり、実務経験に基づいて柔道整復師養成に向けた授業を展開する。
到達目標	柔道整復師が実際の施術で遭遇する外傷への的確な対応力と技能、即ち「臨床力」を在学中に可能な限り多く習得することを目的とする。
準備学習の内容	復習が重要。授業を受けたその日のうちに①教科書を読み返す ②ノートをまとめる ③実技動作を繰り返し復習する などをして欲しい。
授業期間全体を通じた授業の進め方	小グループによる実技演習を行う。 欠席はたとえ一回であっても貴重な学習機会を失うことになる。安易に休まない。 授業が効率よく進めば実技演習の機会を増やす。

評価前提条件	単位認定に必要な出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。	
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	○オリエンテーション 1. 計画確認 2. この実習、ここからの進め方
2	○演習 1. 骨折脱臼の診察と徒手整復、整復後の確認
3	○演習 1. 骨折脱臼の診察と徒手整復、整復後の確認 2. 応急的な固定への連携
4	○演習 1. 骨折脱臼の診察と徒手整復、整復後の確認 2. 整復困難な例への対応
5	○演習 1. 骨折脱臼の診察と徒手整復、整復後の確認 2. 異常経過への対応
6	○演習 1. 軟部組織損傷の診察と徒手検査
7	○演習 1. 軟部組織損傷の診察と徒手検査 2. ストレステストの一般的注意
8	○演習 1. 軟部組織損傷の診察と徒手検査 2. 所見なしの捉え方 3. エンドフィール
9	○演習 1. 軟部組織損傷の診察と徒手検査 2. 複合的な判断
10	○この実習の振り返り ○総 評

授業計画書

基本情報	科目名称	柔道整復実技Ⅵa			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	講義	前期	3年	2	60(40)
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	加藤 稔啓			接骨院等勤務：12年 専門学校勤務：20年		加藤 稔啓

教科書	「柔道整復学理論編第6版」南江堂 「柔道整復学実技編第2版」南江堂 「包帯固定学第2版」医歯薬出版社
参考文献・資料等	他に必要な内容は、プリントや板書を用いて学習を進める。

授業の方法及び内容	臨床で多く遭遇する外傷を課題として設定し、これに対応する診察法、整復手技、検査手技を繰り返し実習し、実際の柔道整復の施術に対応できるよう、これらの方法と手技を順序だてて組み、実践的な演習を行う。 担当教員は医療施設(接骨院・整形外科等)において、12年間勤務した経験があり、実務経験に基づいて柔道整復師養成に向けた授業を展開する。
到達目標	柔道整復師が実際の施術で遭遇する外傷への的確な対応力と技能、即ち「臨床力」を在学中に可能な限り多く習得することを目的とする。
準備学習の内容	復習が重要。授業を受けたその日のうちに①教科書を読み返す ②ノートをまとめる ③実技動作を繰り返し復習する などをして欲しい。
授業期間全体を通じた授業の進め方	小グループによる実技演習を行う。欠席はたとえ一回であっても貴重な学習機会を失うことになる。安易に休まない。授業が効率よく進めば実技演習の機会を増やす。

評価前提条件	単位認定に必要な出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	○オリエンテーション 1. 計画確認 2. この実習の進め方
2	1. 柔道整復で用いる衛生材料と加工法
3	1. 基本包帯法 2. 包帯法各論
4	1. 鎖骨骨折の固定 (リング or 8字 or セイヤー)
5	1. 上腕骨骨幹部骨折の固定 (M 三角副子)
6	1. コーレス骨折の固定 (クラーメル副子+局所副子+三角巾)
7	1. ボクサー骨折の固定 (アルミ掌側副子)
8	1. 示指PIP 関節背側脱臼の固定 (アルミ掌側副子)
9	1. 下腿骨骨幹部骨折部の固定 (クラーメル副子+局所福子)
10	1. 肋骨骨折の固定 (さらし+厚紙)
11	1. 肩鎖関節上方脱臼の固定 (RJ 法+テーピング)
12	1. 肩関節前方脱臼の固定 (局所副子+三角巾)
13	1. 肘関節後方脱臼の固定 (クラーメル副子+三角巾)
14	1. アキレス腱断裂の固定 (クラーメル副子)
15	1. 柔道整復におけるテーピング法
16	1. 膝関節内側側副靭帯損傷のテーピング固定 (X*3)
17	1. 足関節外側靭帯損傷のテーピング固定 (BW *3)
18	1. 足関節外側靭帯損傷のテーピング固定 (F8+HL)
19	○ この実習の振り返り1
20	○ この実習の振り返り2 ○総括

授業計画書

基本情報	科目名称	柔道整復実技Ⅶb			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	講義	後期（前半）	3年	(2)	60(20)
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	加藤 稔啓			接骨院等勤務：12年 専門学校勤務：20年		加藤 稔啓

教科書	「柔道整復学理論編第6版」南江堂 「柔道整復学実技編第2版」南江堂 「包帯固定学第2版」医歯薬出版社
参考文献・資料等	他に必要な内容は、プリントや板書を用いて学習を進める。

授業の方法及び内容	臨床で多く遭遇する外傷を課題として設定し、これに対応する診察法、整復手技、検査手技を繰り返し実習し、実際の柔道整復の施術に対応できるよう、これらの方法と手技を順序だてて組み、実践的な演習を行う。 担当教員は医療施設（接骨院・整形外科等）において、12年間勤務した経験があり、実務経験に基づいて柔道整復師養成に向けた授業を展開する。
到達目標	柔道整復師が実際の施術で遭遇する外傷への的確な対応力と技能、即ち「臨床力」を在学中に可能な限り多く習得することを目的とする。
準備学習の内容	復習が重要。授業を受けたその日のうちに①教科書を読み返す ②ノートをまとめる ③実技動作を繰り返し復習する などをして欲しい。
授業期間全体を通じた授業の進め方	小グループによる実技演習を行う。 欠席はたとえ一回であっても貴重な学習機会を失うことになる。安易に休まない。 授業が効率よく進めば実技演習の機会を増やす。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	○オリエンテーション 1. 計画確認 2. この実習、ここからの進め方
2	○演習 1. 柔道整復で実施する固定法 2. 包帯材料の組み合わせ 3. 包帯技法の組合せ
3	○演習 1. 柔道整復で実施する固定法 2. 経過に応じた方法の選択 3. 材料加工
4	○演習 1. 柔道整復で実施する固定法 2. 異常経過への対応：緩み、再転位
5	○演習 1. 柔道整復で実施する固定法 2. 異常経過への対応：緊迫
6	○演習 1. 柔道整復で実施するテーピング法
7	○演習 1. 柔道整復で実施するテーピング法 2. スポーツテーピングとして
8	○演習 1. 柔道整復で実施するテーピング法 2. リスクへの対応
9	○演習 1. 柔道整復で実施するテーピング法 2. 柔整固定法との組み合わせ
10	○この実習の振り返り ○総 評

授業計画書

基本情報	科目名称	柔道整復実技Ⅶa			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基野	実技	前期	3年	2	60(40)
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	勝村 由香			接骨院等勤務：7年 専門学校勤務：8年		勝村 由香

教科書	『柔道整復学・実技編』南江堂
参考文献・資料等	『解剖学』南江堂

授業の方法及び内容	柔道整復師に必要な診察・整復・固定について学ぶ。 材料作成から行い、柔道整復術について理解を深める。 担当教員は医療施設(接骨院・整形外科等)において、7年間勤務した経験があり、実務経験に基づいて柔道整復師養成に向けた授業を展開する。
到達目標	(1) 下腿部の損傷について理解できる (2) 足関節部の損傷について理解できる
準備学習の内容	下腿部および足関節部の解剖について理解する
授業期間全体を通じた授業の進め方	グループを作成し、患者・助手・術者を順番に担当する。

評価前提条件	単位認定に必要な出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。

評価方法	定期試験 100点満点中 60点以上合格 平常点 0点またはマイナス 10点
------	--

授業計画

1	下腿部解剖 下腿骨近位端部骨折
2	下腿両骨骨幹部骨折
3	脛骨単独骨折
4	腓骨骨幹部骨折
5	下腿骨疲労骨折
6	下腿骨果上骨折
7	アキレス腱炎 アキレス腱周囲炎 アキレス腱断裂
8	下腿三頭筋肉離れ 過労性頸部痛 コンパートメント症候群
9	足関節部・足部の解剖 下腿骨遠位端部骨折及びひ脱臼骨折
10	下腿骨遠位端部骨折及びひ脱臼骨折
11	下腿骨遠位端部骨折及びひ脱臼骨折
12	足根骨骨折
13	足根骨骨折
14	足根骨骨折
15	足関節捻挫
16	足関節捻挫
17	総復習
18	総復習
19	期末試験
20	解答解説

授業計画書

基本情報	科目名称	柔道整復実技Ⅶb			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	実技	後期（前半）	3年	(2)	60 (20)
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	勝村 由香			接骨院等勤務：7年 専門学校勤務：8年		勝村 由香

教科書	『柔道整復学・実技編』南江堂
参考文献・資料等	『解剖学』南江堂

授業の方法及び内容	柔道整復師に必要な診察・整復・固定について学ぶ。 材料作成から行い、柔道整復術について理解を深める。 担当教員は医療施設（接骨院・整形外科等）において、7年間勤務した経験があり、実務経験に基づいて柔道整復師養成に向けた授業を展開する。
到達目標	(1) 顎関節の損傷について理解できる (2) 体幹の損傷について理解できる (3) 大腿部の損傷について理解できる
準備学習の内容	顎関節、体幹および大腿部の解剖について理解する
授業期間全体を通じた授業の進め方	グループを作成し、患者・助手・術者を順番に担当する。 授業毎に理解度を確認するため、グループで発表する。

評価前提条件	単位認定に必要な最低出席回数は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。

評価方法	定期試験100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点
------	------------------------------------

授業計画

1	顎関節解剖
2	顎関節脱臼
3	体幹解剖
4	肋骨骨折
5	下肢解剖
6	大腿部肉離れ①
7	大腿部肉離れ②
8	総復習
9	期末試験
10	解答解説

授業計画書

基本情報	科目名称	高齢者・競技者の外傷予防 a			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	講義	前期	3年	2	60 (40)
	授業担当者 (所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	瑞泉 誠			接骨院等勤務：10年 専門学校勤務：18年		瑞泉 誠

教科書	『高齢者・競技者の外傷予防』医歯薬出版株式会社
参考文献・資料等	標準整形外科学・運動学・リハビリテーション医学

授業の方法及び内容	教科書をもとに外傷の機序を復習しながら、予防やケアの方法を実習も交えて学習する。 担当教員は医療施設（接骨院・整形外科等）において、10年間勤務した経験があり、実務経験に基づいて柔道整復師養成に向けた授業を展開する。
到達目標	身体アライメントやタイトネスの評価ができ、ここに対するアプローチを医療やスポーツの現場で実践できる。
準備学習の内容	前期履修の運動学や柔道整復理論の復習
授業期間全体を通じた授業の進め方	教科書をもとに講義と、実習を行う。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	オリエンテーション・運動生理学の概要
2	アライメント測定
3	レジスタンストレーニングと骨格筋
4	ストレッチと骨格筋
5	運動が生体に与える影響
6	運動とエネルギー代謝
7	運動と骨・筋肉
8	運動と呼吸・循環
9	運動中の血圧上昇
10	運動とホルモン
11	競技者の生理学的特徴
12	競技者の外傷発生状況
13	外傷の内的要因
14	外傷の外的要因
15	外傷の予防対策
16	タイトネス測定
17	外傷予防に必要なコンディショニング1
18	外傷予防に必要なコンディショニング2
19	外傷予防に必要なコンディショニング2
20	期末試験

授業計画書

基本情報	科目名称	高齢者・競技者の外傷予防b			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	実習	後期（前半）	3年	(2)	60 (20)
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	瑞泉 誠			接骨院等勤務：10年 専門学校勤務：18年		瑞泉 誠

教科書	『高齢者・競技者の外傷予防』医歯薬出版株式会社
参考文献・資料等	標準整形外科学・運動学・リハビリテーション医学

授業の方法及び内容	教科書をもとに外傷の機序を復習しながら、予防やケアの方法を実習も交えて学習する。 担当教員は医療施設（接骨院・整形外科等）において、10年間勤務した経験があり、実務経験に基づいて柔道整復師養成に向けた授業を展開する。
到達目標	身体アライメントやタイトネスの評価ができ、ここに対するアプローチを医療やスポーツの現場で実践できる。
準備学習の内容	前期履修の運動学や柔道整復理論の復習
授業期間全体を通じた授業の進め方	教科書をもとに講義と、実習を行う。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	体幹の外傷予防
2	下肢の外傷予防
3	足関節外傷予防
4	成長期の外傷
5	成長期の外傷予防
6	高齢者の外傷
7	高齢者の外傷予防
8	復習
9	試験
10	解説